

此かぞ數へてみたが、何うも思はしいのがない。第一お嬢さまが顔を縦に掉らせられないから困る。困つた揚句に、一つの名案を考へ出した。

▲婿えらみの方針は、其の年大學卒業の秀才中から撰ぶといふことであつた。秀才といつても澤山にある。其の中の何人を撰んだものか。それは嬢に撰ばせるが可いといふので、或る日のこと、其等の秀才二十餘名を飛鳥山の別荘に招待した。諸君の御卒業を祝する。これが招待の名目であつた。

▲秀才先生一同は、其の名目を鶉呑に信じて其の招待に應じた。

さうして卒業の元氣に乗じて、牛飲し、馬食し、放歌し、高吟し、飛鳥の山も揺がんばかりに騒ぎ散らした。一同はまだまだホンノお坊ちやんであつたのである。

▲此の時 濫澤男は、嬢を襖の蔭に忍ばせて、

『お前の好いのをお選びよ。』

さういひ聞かせた。嬢は一同の顔を見較べて、娘一人に婿二十人、稍々撰擇に苦しんだ末に、

『あの方が……………。』

阪谷芳朗男

さ、一隅に端座せる一好男子を指さした。
▲其の好男子、それが今の阪谷男であつたのである。

(八)

▲男が東京市長として何事を爲し得るやは、就任日尙ほ淺き今日、全然未知數に屬するが、今までの閱歴から推して考へると、可もなく不可もなきに終りはしないか。甚はだ懸念である。
▲男は頭腦の明晰な人である。學者である。財政の理に通じた人である。事務的才能に富んだ人である。正直な人である。温厚な人である。

である。斯る人に市政を托しておけば、財政を紊亂せしめたり、市政を腐敗せしめたりする憂は萬々あるまい。此の點は安心である。
▲が、市政は市長の手に依つてのみ行はれるのではない。市會があり、市參事があつて、而もそこには醜類とやらが跋扈してゐる。市長として善政を施さうとするには、先づ其の醜類を壓屈してかゝらなければならぬ。男にそれが出来るであらうか。少々疑問であらうと思ふ。

▲男が温厚であることは、個人としては誠に結構であるが、醜類壓屈の爲には、性格上尙ほ足りないものがある。それは剛毅である、

阪谷芳朗男

勇断である、闘志である。男にこれらの性格の缺けてゐる限りは、
東京市長としての將來も、何となく見透される心地がある。
男たる者大に繁華一番しなければなるまい。

■勤儉の實行者安田善次郎氏

(一)

▲安田善次郎氏が實業界に有する信用と勢力は、濫澤榮一男
に比して多く劣るものではないが、男は餘程行き方が違ふ。男の
生涯は、比較的波瀾曲折に富んでゐるが、氏は實業家を以て終
始し、然も極地道に進んで來たのであるから、人を驚かすやうな事
蹟がない。

▲氏の言は氏の閱歴の然かある所以を語つてゐる。曰く、

安田善次郎氏

『目的に向つて順序正しく進むといふこと、余はこれを處世上第一の心得として守つて來た。何事も急激に功を成さうと思へば必ず失敗する。譬へば道を歩くにしても、百里の道を十日で行かうと思ふならば、初めは七八里といふやうに、成るべく内輪に定めてかゝる。さうして足が慣れたとなると、十里、十一里と里數を増して行く。すれば決して怪我はないのである。』

急激に事をしないで、急がずに、撓まずに、順序正しく進んで來たさいふのが、氏の閱歷の特色である。

▲順序正しく進むといふことは、一見容易の事のやうであるが、實は決して然うではない。それには志が確固としてゐなければならぬ。又た忍耐力が強くなければならぬ。順序正しく進んでゐたのでは、結果を見るこゝが遅い、成功の歡びが容易に來ない。薄志の人、忍耐力の乏しい者は、中途で飽きてしまふは必定である。

(二)

安田善次郎氏

▲前記氏の言は、徳川家康の語を想ひ起さしめる。

人の一生は、重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。心に望み起らば、困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ。勝つことばかり知りて、負くることを知らざれば、害其の身に至る。己れを責めて人を責むるな。及ばざるは過ぎたるに勝れり。

▲牛の歩みの遅々たりながら、怠らず行つて千里の外を見た者、言者家康は其の人であつた。さうして氏も又た其の人である。實業界の徳川家康、氏は能く此の讃辭を受くるに堪ゆるであらう。

(三)

怠らず行かば千里の外も見ん

牛の歩のよしおそくとも

▲氏の生地は越中富山、天保九年の冬十月、始めて呱呱の聲を揚げた。父は富山藩の士であつたが、侍とはホンの名ばかり、受くる

安田善次郎氏

所ところの小せうろく祿りくは、以もつて一か家かを支さふるに足たりない。因よつて傍かたはら農のう業げふを營いみ、細ほ々そながらも平へい和わな家か庭ていを作つくつてゐた。

▲十三四歳頃の氏は、大根や午莠を棒の先に懸けて、富山の町へ賣りに行つたものである。侍の悴もこれでは甚はだ心細いわけ。以て氏の父の小身であつたことが解る。

▲當時は階級制度の厳しい世の中で、町人百姓が殆んど絶對的に士籍に入り得なかつたと同様、同じ侍の間に於ても、小身の者が家格を進めて大身の列に至るといふことは、全然不可能とせられてゐた。實力よりも門閥を重んじたのである。

▲實力よりも門閥を重んずる社會は、實力ある者の堪え得る所でない。七八歳の頃寺小屋に入つて、國盡し、商賈往來等の文字を習ひ、孟子、論語の句讀を受け、十二歳の頃早くも學を廢した氏には、無論學問としては無かつたのであるが、然も小身にして出世の見込みのない己の境遇に安んじ得る爲めには、氏は餘りに惻然であつた、自信が強かつた、功名の念が盛んであつた。

▲武士の家には階級の障壁があつて、これを越えることは全然出来ない。斯くて才智も施すに由なく努力も無効に歸してしまふ。人間一生涯の運命は、處生の第一日に於て早くも決定し、實力ある者

安田善次郎氏

も泣く泣く下層を這はなければならぬ。詰らない、實に詰らない。斯ういふ不平がいつしか氏の小さき胸に宿つた。

(四)

▲ところが氏の此の不平は、或る事の爲めに一層強力なるものさなつた。

▲一日の事氏が突降る田甫路を歩いてゐるさ、向ふの方から一人の青年武士が、帯刀の姿凛々しく肩を聳かし、大股に歩いてやつて来た。氏は路傍に蹲つて、謹しんで敬意を表した。

▲すると彼の若侍は、ザロリと氏を見下して、

『コリヤ、汝の土下座は粗末に見えるぞ。頭が高

い。尻が高い。今少し低くゐる。無禮を致せば手

打にするぞ。乃公の腰には刀があるぞ。汝には分

らんか。』

との威張り方。氏は其のいふが儘に平身低頭して、辛く虎口を脱することが出来た。

▲さらぬだに己が小身の侍たることを不平に思つてゐた氏は、此

安田善次郎氏

の一事に因つて、愈々其の不平を深くし、大にし、強くして、最早や堪え難き心地があつた。

▲殊に一歳、藩主に御用を勤むる金貸の手代が、供一人を伴れて富山へ来たとき、勘定奉行が、自身それを出迎へて、待遇の鄭重なること臣下の其の主に於けるが如きを見ては、士籍を脱せんとする氏の志は、確固不拔のものとなつた。

▲武士の侍のと有がたがるけれど、勘定奉行さへ町人の前に叩頭三拜する。金力には武士も敵はぬ。金力は権力である、地位である、名譽である。武士なんか何にならう。武士よりも於大なる

ものがある。氏は斯う思つた。自分はいつまで名ばかりの武士であるのか。此の際、斷然志を決して、武士以上のものとならなければならぬ。氏はかくと決心した。

▲かくと決心して家を出奔し、江戸へと志したが、途中關所の手形がなくて失敗に終るさ、一旦家に歸り、居ること三年、再度の出奔を企てし、首尾よく江戸行きを目的を達した。前の出奔は十六歳の時、後の出奔は十九歳の時であつた。

(五)

安田善次郎氏

▲江戸へ着くと、氏は日本橋區内の或る玩具屋に奉公し、爾後三年間、店員生活に日を送つた。さうして後年大物たるべき資質を此の間にも充分に發揮した。

▲氏は其の店員時代を次のやうに語つてゐる。

『店には客の出入が多かつた。随つて履物が亂雑になつて、下駄が草履と重つてゐたり、足駄が仰向に倒れてゐたりした。それを直すのが小僧の役目、ところが外の小僧は直さない。余はそれを進んで

直した。萬事此のとほりに、自分で仕事を探し出しては、表裏なく精一杯に働いたので、主人からも客からも、好い若者であると賞められた。』

▲主人の利益を自分の利益のやうに思つて働く店員は少い。主人の物を自分の物のやうに思つて大切にする小僧は少い。此の點に就いても、氏は善い心掛けを持つてゐた。例へば荷物を解いた繩屑を他の店員が打ち棄てなどすると、

『無駄なことをするな、まだ結構に使へるではない

ら人情迄を知らうさいふこそ、これが目的であつた。三年間の奉公は氏をして遺憾なく此の目的を達せしめた。

▲此に於て氏は轉じて兩替屋に奉公し、こゝでも三年間忠實に働いた。

▲前後六年、氏が商人としての経験は充分に積まれた。自分は何ほどの事をなし得るかといふ、自分の手腕に對する自信も出來た。況してや年は二十六歳、氏が獨立の實業家たるべき時は來た。氏は獨立することに決心した。

▲が、困つたことには資本がない。資本よりも人さいふけれども、

安田善次郎氏

か〇

かういつてそれを拾ひ上げる、何事もそんな風であつた。

▲前者即ち下駄の事は氏の勤を示し、後者即ち繩屑の事は氏の儉を示す。勤と儉さがある以上、實業家としての成功は期して待つことが出来る。

(六)

▲氏が玩具屋に奉公したのは、玩具商人となる考へからではなく、日々江戸市内の小賣店へ品物を卸し歩く間に、江戸の事情、地理か

それも程度問題で、全くの空拳赤手では、何事もなし得るものではない。獨立の志は火の如く燃えながら、囊中の無一物には、流石の氏も當惑した。

▲如何にして資本を得んか。氏は種々と考へを運らした末に、所持の煙草入れと紙入れとを賣ることにした。生來の愛煙家であつた氏は、可なり吟味した煙草入れを持つてゐた。紙入れも珍らしい品であつた。氏は二品を持つて横濱へ行つて、知人に頼んで外國の商館にそれを見せた。商館は二十五兩に買つて呉れた。

▲二十五兩、これ些々たる金である。而も氏が今日五千萬圓の豪富

を成した其の萌芽は、此の二十五兩に在つたのである。

▲氏は煙草入れを賣り拂ふと同時に、斷然喫煙を廢めてしまつた。

『善い事と知つたら必ず實行し、悪い事と思つたら直に禁示する、此の心がけが必要である。余は若いころ煙草が嗜きであつた。けれども獨立の商人となる資本が得たさに、煙草入を二十五兩に賣つた時限り、斷然此の惡習慣を改めて、今尙ほ禁煙のまゝである。』

▲氏は煙草入れを賣つたことに依つて、一方には營業の資本を得、他方には禁煙の良習慣を得て、つまり二重の利益を收めたのである。所謂一舉兩得である。

(七)

▲新たに二十五兩の資本を得た氏は、海苔、鯉節、外に兩替を鑿れて開業した。場所は日本橋人形町通りの乗物町、間口二間、奥行五間の家が、家賃大枚二分と二朱、小僧一人、飯焚婆一人、都合三人暮しの一小商店は、店飾りも餘り立派ではなかつた。

▲けれども氏の店は、信用すべき店であつた。氏は後年妻を迄へた時、自分の營業方針を語り聞かせて、

『客を大切にしなければならぬ。さうして自分の利益よりも客の利益を重んずる、これが余の營業方針である。』

といったが、此の方針は鯉節屋開業の第一日に於て、早く既に實行せられた。

▲であるから、品物はつとめて精良なるを撰び、値段は出來得るだ

安田善次郎氏

け廉くし、而も一言の偽りを用ゐずして、極々正直に營業した。海苔ならば一枚々に改めるとか、鯉節ならば乾き工合などを調べるとか、そんなこと迄注意した上で、それを客の手に渡した。偶々品質の悪い物を販ぐことがあつても、包まず隠さず其の旨を告げて、値の上それを賣つた。

▲賣る者は黒人である。買ふ者は素人である。黒人が素人を欺くことは何でも無い、最易いことである。であるから世間の商人はよく欺く。商人であるから油断が出来ない、世間ではよくいふ。氏の正直なる商法振りには、顧客をして安心せしめた。自ら信用が

附いて來た。店は繁昌せざるを得なかつた。

(八)

▲氏は又た毎朝三四時の間に起き出て、夜明けの露の立單めた街上に竹箒打ち揮りつゝ、向ふ三軒兩隣の前を掃くことを例とした。氏が利己一遍の俗商人ではなく、清い心がけの人であることは、此の一事を以て見る事が出来る。

▲雇人使用の道に於ても、大に感ずべきものがあつた。自分は繁忙極まる業務を執つてをりながら、老婆の爲めに水を汲んでやつた

安田善次郎氏

り、小僧の爲めに飯を焚いてやつたりした。

▲氏とても勿論小僧に向つて勤勉を強いた。而もそれはたゞ小僧に強ひたのみではなくて、氏自身が一層多く勤勉であつた。氏は當時を語つて、

『毎朝小僧よりも早く起きた。さうして家の前から近所隣りの前の掃除を済し、釜の下を焚きつけて後ちに、始めて小僧を起すことにしてゐた。』

といつてゐる。氏は實に身を以て小僧を率ゐたのである。

▲身を以て率ふる、これ豈店員使用法の最賢最良なるものではないか。

(九)

▲勤儉と熟している。勤に至らざる所のなかつた氏は、儉に就ても十二分の注意を拂つた。時は稍々後ちであるが、新たに迎へた妻にいい聞かせた言葉は、氏が如何に節儉々約を重んじたかを示してゐる。曰く、

『余の節儉は人一倍であるから、其の覺悟でゐなけ

安田善次郎氏

ればならぬ。利益の十分の八以内で生活を立てるといふのが、余の方針である。であるから粗食粗衣に甘んずるは勿論、立派に装つて物見遊山に出かける他家の内儀を羨むやうでは、余の妻たる資格がないのである。其のつもりで、セツセと共稼ぎに稼いで貰ひたい。』

▲如何に勤め働らいても、儲けた金を一文残らず費消してしまつたのでは、何時まで経つても元の本阿彌、懐ろに金の出来る時はない。

勤と儉、此の二つを併せ守ることが必要である。此の二つは車の兩輪、鳥の兩翼の如きもので、其の一を捨てることは出来ない。

▲貯蓄 心は近時大に發達した。まことに慶すべきであるが、氏にいはせると、未だ及ばざる所がある。第一すべての人が貯蓄の方針を誤つてゐる。

『世間の人の貯蓄法を見ると、収入の内必要なだけを使ひ、残りがあればそれを貯蓄すると、かういふ方法を取つてゐる。それでは面白くないと思

ふ。余の貯蓄法は貯蓄といふことを第一に置く。収入の一部は必ずこれを貯蓄して、其の残りを使ふのである。』

▲これは味ふべき言である。人は使つた残り貯蓄し、氏は貯蓄した残りを使ふ。彼は使用本位の貯蓄。此は貯蓄本位の貯蓄。此の二者の間には、大分の相違がある。何れが優つてゐるかといへば、無論氏の貯蓄法である。

▲使用本位の貯蓄に在つては、収入の少い時、支出の多い時などに

於て、屢々貯蓄を缺かなければならないが、貯蓄本位の貯蓄に在つては、如何なる場合にも貯蓄が出来る。即ち此の點が優つてゐるのである。

(十)

▲氏が立志の第一日に於て誓つたは、千兩分限者になることであつたが、勤儉を併せ行つた結果として、千兩分限者は忽ちの間に通り越して、二千兩分限者となり、三千兩分限者となり、五千兩分限者となり、一萬兩分限者となり、遂には今日の如き五千

安田善次氏

万分限者となつた。勤儉の力も大きいではないか。

▲氏の閱歴には、少年後進者の龜鑑とすべきものが澤山あるが、氏の言にも味ふべきものが少からずある。曰く、

「人は赤心を以て事に當るのでなければならぬ。縦ひ他人の事でも、それを自分の利害のやうに見る此の精神が必要である。」

▲又た曰く、

「心に誓ひを立て、必ずそれを實行するといふ

こと、これが最も大切である。余は若い時酒を好んだが、善からぬ事と思つたから、今後五年間は決して盃を取るまいといふ誓ひを立て、それを實行して、非常に善い修業となつた。」

▲又た曰く
「一家を經營するには、収入と支出とを相對照し、収入を標準として一切の支出を定めるといふ。此の心がけが必要である。」

古語に所謂る、

入るを計つて出づるを制す。
と同じ意味がある。

(十一)

▲又た曰く、

「貯蓄し得る額の少いことは決して失望すべきでな
い。金高は少くとも、資本を造り、資本を増さう
といふ其の貯蓄心は、謂はゞ無形上の資本であつ

て、必らず人の信用を受け、有形上の資本と同じ
効力を有するのである。」

▲又た曰く、

「某伯爵家に有名な茶入れがある。先祖が寛文三年
に小判七百枚を出して買った品とか。今此の茶入
れの金に年六朱の利息を附してみると、明治三十
五年迄二百三十年間には、今日の金貨で九十三億
五千八百二十三萬四千三百四十七圓となる。これ

を思ふと、不要不急な物に金を費すなどはとても出来ない。』

▲言々句々すべて味ふべきである。これを味ひこれを實行したならば、何人も成功の堂に登るべきが出来てあらう。

▲然し金を溜るばかりが人間の能事ではない。溜めた金を慈善其の他の公共事業に使ふことは、富者たる者當然の義務である。氏は果して此の義務を盡しつゝあるか。此の點に就いて、氏は如何の考へを持ってゐるか。打見た所全く珍貴漢であるらしくもある。

▲「ごころが然うでない。氏曰く、
『収入の内幾分づゝを貯蓄して、漸次資産を殖して行くことは、いふまでもなく必要であるが、一方分相應に慈善的の金を出すことが必要で、これは人たる者の先天的義務である。』
又曰く、

『余が慈善の爲めに支出する金額は、余の生活費よりも多い位である。』

安田善次郎氏

▲大に可し。然し善事には限りがない。氏たる者は、慈善費が生活費よりも多いといふことを以て、善の至極を盡したとはせず、更に大に努力すべきである。

▲單に慈善といはず、一般公共事業にも盡して貰ひたい。公共事業には盡すべき方法がある。それも考へて貰ひたい。社會の爲めたるは勿論、氏の人物を一層大ならしむる所以であらうと思ふ。

一人一事

○井上馨侯洋行の爲に再度腹を切らんとす

▲時は文久三年、井上馨侯は伊藤俊輔(故博文公)、山尾庸三、井上勝、遠藤護助の四人と共に、藩主毛利公に願つて、英國に留學することとなつた。

▲當時は攘夷論の盛んな世の中で、殊に長藩は其中堅、侯等も無論同論者であつた。それが洋行の志を起したのは、我が國には外國軍艦に對抗の出来る軍艦がない、攘夷の實を擧げるに

井上馨侯

就いては、先づ以て大に海軍を起さなければならぬ、と氣が附いたからで、留學の目的は海軍の研究に在つたのである。

▲洋行さいつても、固より公然の洋行ではない。外航禁止の令儀として存した當時であるから、表面は藩の亡命者さいふ名前、竊に行つて竊と歸らうといふ、駈落的洋行である。

▲一行が横濱に着くと、先づ旅費の點を調べて見た。すると一人一ヶ年の費用少くも千兩は要るとのこと、これには驚かざるを得なかつた。藩主から與へられたのは、わづかに六百兩である。これでは何とも仕様がなさいふので、五人は鳩首凝議の結果、江戸の長

藩邸には、鐵砲買入の準備金がある。其の内から借出すこととし、侯は談判委員となつて、藩邸へ罷り出た。

▲さうして其の金を保管してゐる大村益次郎に面會し、事情を具して嘆願に及んだ。大村は面を溢めて、

『それは困る。』

さいふ。談判數次に及んだが、大村は何うしても肯容れない。

▲侯は最早やこれ迄さ決心して、

『何うしても借せないといふのならば、僕は此の場

に於て、君と刺違へて死ぬの外はない。其の覺悟
で返事をして呉れ。』

さ、血相變へて詰め寄せた。すると大村は、

『イヤ待て。お前がそれほどの決心ならば、五千兩
だけ乃公が引受けてやらう。』

とのこと。侯は漸く安心した。

▲其の金を横濱へ持つて歸るさ、一同は大喜び、早速豫れて頼んで
あつたマテソン會社の支配人ユー、マテソンに遇つて、

『何卒宜しく。』

と申入れた。マテソンは五人の決心をほめて、

『ぢや茶船の船長に頼んで上げやう。』

さいふのであつた。

▲やがて茶船は入港したので、五人は通知に依つて會社へ出かけた。さうして少時待つてゐるさ、マテソンが顔を出して、

『茶船の船長に話した所が、何うしても可けないといふので、折角だが仕方がない。』

案外にもかういふ挨拶である。

▲五人は失望落膽して、今更らオメオメと藩へ歸られるものではない、此の上は切腹あるのみださ、將に刀に手をかけやうとするマテソンは大に驚いて、

『ぢや今一度談判してみるから、マア少時く待ち給へ。』

と、再三談判して呉れた結果、やうやく船長も承諾した。五人はホッとして安心の胸を撫てた。

▲かくて茶船に乗込んだが、お客様としてとはなく、水夫同様の取

扱ひを受けたのであるから、其の困難は一方でなかつたさういふ。

○諸戸清六氏債權者を感じしむ

▲桑名の諸戸さいへば、天下誰知らぬ者なき富豪である。わづか一代の間に、これほどに仕上げた先代清六氏の偉人物であつたことは、何人もこれを認めなければならぬ。

▲氏の出生は弘化三年丙午の年である。幼にして父に別れたけれども、次男に生れた幸ひには、家業を營む苦心もなく、兄の家業を助ける暇には、宮相撲を取りなどして、呑氣に其の少年時代を送

諸戸清六氏

つた。

▲ところが氏が十八歳の時、兄は忽然他界の人となつた。氏は今や一家經營の事に當らなければならぬ。それは可い。然し兄が氏に遺したものは、資産でなくして借金、二千圓に近い借金であつた。氏はこれには困り果てた。

▲十八歳の少年は、一人の母と一人の姪とを養ふと同時に、此の借金を濟すに就いて、苦慮數日其の方法を考へた。方法といつて外にはないが、

稼ぐに追ひ附く貧乏なし。

の諺に力を得て、一日母に語るらく、

『私は幸ひに體が丈夫ですから、これからは、人より三倍も五倍も働きます。稼ぐに追ひ附く貧乏なしといひますから、すれば營つて行かれないこともありません。イヤ、大丈夫やつて見せます。』

▲乃で氏は、債主に告ぐるに自家の決心を以てし、氏の立てた借金償却法に對して同意を求めた。債主は若きに似ぬ氏の決心に感

心して、

『宜しい。兎に角やつて御覽なさい。』

このことであつた。

▲氏は其の好意を謝し、それよりは一生懸命に稼いだ。夙に起き

夜に寝れ、營々として稼ぐ一方には、極端に節約を行つたので、三

年の後には、借金全部を償却し、尙ほ若干の資本を餘し得た。

果然、稼ぐに追いつく貧乏はなかつたのである。

▲債主は今更らに感じ入つて、これならば成功疑ひなしと見込

を附け、進んで資本を貸し與へたさうである。

○有賀長雄氏少時路傍に帽子を販ぐ

▲法學博士有賀長雄氏といへば、我が國國際法學界の泰山北

斗である。而も其の少年時代には、貧乏の子として具さに艱苦を嘗

め、或る時は帽子を露店に販いださへある。

▲氏の父長鄰氏は國學を以て立ち、大阪に於て由緒ある家柄であ

つたが、維新後の變動時代に遭逢して、甚だしき貧困に陥り、八人

の子女を養ふことが出来ない所から、自分は學校教師となり、母は

夜々帽子を造りなどして、細き煙も立てがてらあつた。

有賀長雄氏

▲氏はかゝる間に生ひ立つたのである。學校に通ふことも心に任せず、大阪近在に市日のある時には、母の作つた帽子をそれへ特出し、路傍に露店をかまへて、

『帽子は如何、帽子は如何。』

今日大學の講堂に於て、深遠なる學理を説く其の口から、かく呼ぶのであつた。

○桂太郎公の精力的人格

▲桂太郎公は兎角非難の多い人である。大正元年年末から二年春

へかけての民論沸騰、憲政擁護騒ぎなども、公の不人望から來た點が多かつたやうである。

▲然し兎に角に我が國政治界の大立物である。従つて其の技倆其の手腕に卓抜なるものがなくてはならない。平々凡々たる人間が、何として然る大人物となり得やう。公には公としての長所、他人の學び易からざる特異の或るものを持つてゐるのである。

▲何かといへば、即斷即決の意志である。万難を排して奮進する所の精力的人格である。

▲公は或る事件に對する時、先づ其の利害、是非を考へ、是を知ら

桂太郎公

利き見れば、次にはこれが遂行の能不能を考へる。不能と見れば直ちにこれを捨て、能と見れば直ちにこれを取るものであるが、それは實に「直ちに」である。即斷即決、其の場に於て決定してしまふ。

二日も三日も考へるなどいふことは決してない。

▲既に決定した以上は、容易にそれを變更しない。途中に於て何か障碍が起つても、何處迄もそれを遣つ附けてしまふ。

『可からうと思つたが、案外に出来憎さうだから、それは一時見合せやう。』

さいる言葉は、曾て公の口から洩れない。

▲人は公を八方美人だとかいふ。成る程然ういふ所もあらうが、一面に於ては、輿論を顧みず、反對を怖れず、驀らに進むといふ勇氣がある。公が他から非難される一原因はこゝに在るのであるが、これは寧ろ公の長所と認めなければならぬ。

▲嘗て政黨を無視した公は、今や立憲同志會の黨首である。公の政治的生命は一新した。精力の豊かなる公が、今後何事なすべきかは、蓋し政界の見物であらう。

○ 珍田捨己子 勞働して苦學す

▲ 義に山本内閣成らんとするの前、其の外務大臣に擬せられた珍田捨己子は、舊津輕藩士で、子が外務大臣になれば、青森縣から始めて大臣が出たわけである。

▲ 子は夙に本多庸一氏の東奥義塾に學び、成績拔群、神童の譽れが高かつた。義塾の教師米人ジョン、イング氏は、非常に子の才學を愛し、其の關係から、子は今の和蘭公使佐藤愛鷹氏等五名と共に同藩の撰拔生として米國に留學することとなつた。それは明治十

年頃のことである。

▲ かくて子は、インデアナ州のデポー大學に入學したが、何分藩から支給される學資が少いので、子は同行者と共に勞働をし、それに依つて學資を支へた。即ち子も亦た所謂苦學生の一人であつたのであるが、而も苦學の甚だしかつたことは、子と佐藤氏とを除く他の三名が、爲めに病氣を發して、鬼籍に上つたことを見ても凡そ察せらるゝのである。

▲ 當時デポー大學所在の町に、ペインといふ大の日本最負の婦人があつて、子等に同情して面倒を見て呉れたといふ。

▲明治十四年に、めでたく同大學を卒業すると、子は歸朝して、久しく東奥義塾に教鞭を執つてゐたが、明治十八年外務省に入つて翻譯官となつた。子が外交界に身を投じた始めである。

▲子に在つて嬉しいことは、幼より熱心なるクリスチャンで、人格が極めて高尚なことである。夫人岩子は佐藤愛鷹氏の妹で、數箇國の語にも通じ、外交官夫人として恥かしくない人であるとか。

人生の一大問題

此の一篇は——成功とは何ぞや——如何にして成功すべきか——成功に對する用意如何——等の問題を解釋す。

一 成功とは何ぞや

○成功、これ近時の流行語である。今日の人、少年も青年も、壯年者も、若くば老人に至るまで、役々汲々として成功に努めてゐる。如何にして成功すべきか。今人の大問題とする所は此に在る。夢寐にも此の問題を忘れずして、自ら最善とする所に向つて勇往邁進する有様は、壯烈といはんか、痛快といはんか、寧ろ物凄きものがあるのである。

○成功とは何か。一言以て之を蔽へば、自ら大なる者となるの意に外ならぬ。

二 一切の物成功を欲す

○大なる政治家となり、大なる軍人となり、大なる實業家となり、大なる學者となり、大なる宗教家となる。是が即ち成功である。今日の人、成功に努めるといふのは、斯くの如き者とならうとするのである。

○斯くの如きが成功の意味であるならば、成功を欲する者は、常に今日の人のみではない。度に於ては或は大強弱の差があらう、然し古人もやはり成功を欲して、爲めに努力を費したのである。古往今來、人として成功を欲しない者はないのである。

○而も廣きに亘つて觀察するならば、宇宙間に存する一切の物、動物植物の類に至るまで成功を欲してゐること、さうして宇宙其の者さへも、成功を欲し成功の途を歩みつゝあることを發見するであらう。

○天地開闢の其の昔、混々沌々万物することの出来なかつた火雲の状態を脱して、天には日月星辰の整然たる運行となり、地には花咲き鳥歌ふ現時の大觀を成すに至つた此の宇宙が、頑冥なる物質的存在であるか、靈智なる精神的存在であるかは、之を哲學者宗教家の檢討に委するとして、兎に角斯くの如き進化を演じ

來つたことは事實である。進化とは何か。不完全より完全に進み、不秩序より秩序に進み、不精美より精美に進む意ではないか。即ち成功に向つての進行ではないか。
○若し夫れ動物や植物やが自己の存在を安固にし、同類同族の繁殖に努力するの大なることは、實に驚嘆すべきものがある。人間のそれと少しも異なる所がない。亦たこれ成功を欲しつゝあるものと視るべきである。

三 自ら大ならんとする欲望

○自ら大ならんとする希望、欲望、人としてこれのない者はない。

此の欲望は實に人間の本性である。自然に依つて備へられたる自然性である。

○而も此の欲望には限りがない。人間の自然性は飽くことを知らない。求めて、求めて、さうして求める。これを人慾の無限といふ。

○昔者マセドンの大王、歴山翁は、東征西伐の極馬を進めてインダス河畔に至り、従者が其の地の正に世界の果なることを告ぐるを聞いて、嗚呼世界復た征すべきの地はないかと、愁然として面を曇らし、長嘆大息したといふことである。一見驚くべきことこのや、てはあがあるが、其の實少しも驚くには足らぬ。尾張中村の一農家

から起つて天下を一統した豊臣秀吉は、更に朝鮮から明國にまで手を延した。幼時を今川氏の人質として送り、後年關八州の主となつた徳川家康は、終には日本六十餘州の主たるべく努めた。彼等は畢竟人慾の無限なることを證明したに過ぎないのである。

四 愚なる思想

○まごころが世には此の欲望を罪惡と見て、これを抑制し去らうとする者がある。此の欲望、果してこれが罪惡であらうか。假に罪惡と

したところで、既に人間の本性、自然性である以上、これを抑制することが出来るであらうか。人間は自然の子である。是非共自然に従はなければならぬ。自然を曲げることには、彼には全く不可能事である。此の不可能事を敢てせんと思ふ者は、到底愚者たるを免れないのである。

○而も此の欲望を罪惡と視るに至つては、一層の愚さいはなければならぬ。

○今の世には、斯やうな愚者が尠からずある。其の一は所謂道徳家である。其の二は所謂宗教家である。

五 一知半解のみ

○所謂道徳家、所謂宗教家に反問する。何故に此の欲望、飽くなくして求むる人慾が罪惡であるか。

○成るほど世の中を見渡すと、多くの人は此の欲望の爲めに罪惡を犯しつゝある。曰く竊盜、曰く詐欺、殘虐、冷酷、虚言、憎惡、羨望、嫉妬、此等皆此の欲望に基く罪惡である。父子相争ひ、兄弟相闘ぎ、夫婦相憎み、朋友相欺き、隣人相排するなどの例は澤山ある。さうして其の原因は、多くは此の欲望に在る。これは争はれない事實であるが、而もこれを理由に此の欲望を罪惡視するのは

早まり過ぎたる考へてある、一知半解の思想である。
 ○彼等は先づ、善とか悪とかいふ其の意味、即ち道徳の何者たるやに就いて、一考を拂ふの必要があるであらう。

六 決して罪惡にあらず

○乞ひ問はん、道徳とは何であるか。平易に解するならば、自分及び他人の存在を安寧幸福ならしむべき行爲若くは意志、これが善である、道徳である。即ち道徳は二つのことを意味する。一は自己の安寧幸福を求めること、他は他人の安寧幸福を求めること。前者を利己といひ、後者を他愛といふ。

○世間通俗の思想に於ては、利己を惡とし、他愛を善とするが、道徳は利己と他愛とに拘はるものではない。寧ろ兩者を包括したものである。

○利己は決して罪惡ではない。思へ商人が孜々として其の業に勞するのは何の爲めであるか。自己の安寧幸福を求めが爲めではないか。即ち利己ではないか。學生が汲々として其の學に勉めるのは何の爲めであるか。自己の安寧幸福を求めが爲めではないか。即ち利己ではないか。

○世に利己を罪惡とする思想ほど不通なる思想はない。殊に他愛の

何たるやを檢して來るさ、此の事は一層明かである。

○他愛即ち他を愛するといふ其の他は、自分と風馬牛相關せざる所の他ではない。自分に繋がる所の他である。忠君愛國は道徳の最大なるもの、即ち他愛の最大なるものであるが、謂ふ所の君、謂ふ所の國は、自分の國、自分の君である。孝さいひ、友といひ、和さいひ、信といふも、其の對象とする所は、自分の父母、自分の兄弟、自分の夫妻、自分の朋友である。

○此に至つて他愛は利己と相繋縁するものである。人は自己を愛するが故に、自己と連なる所の他を愛する、と斯う視て可い。他愛

は利己の擴充されたものである。利己の内には他愛を包括するのである。

○これに由つてこれを觀れば、利己の罪惡でないこと、即ち自己の安寧幸福を求め意志の罪惡でないことは、愈々益々明かである。而も此の意志は自ら大ならんとする欲望に外ならぬ。彼と此とは同じものである。彼の意志が罪惡でないならば、此の欲望も罪惡ではないのである。

七 欲望と宗教

○次に問ふ、宗教とは何であるか。世に宗教があるのは、自ら大

らんさする欲望に基くのである。

○宗教を信する者は、宇宙那の邊かに絶対無限の靈智者を認めて、これを渴仰し、これを憧憬し、其の完全を理想として心を磨き、以て永劫の生命に入らうとする。これ豈大なる欲望ではないか。歴山翁や豊臣秀吉や徳川家康の欲望も、これに比すればいふに足らぬ。

○宗教はこれを信する者に向つて無慾を要求する。而も其無慾は金錢に對する無慾である。名譽に對する無慾である。地位に對する無慾である。基督の云ひけん「神の如く完か」らんとする欲望に至つて

は、寧ろ其の大ならんことを欲する。其の無慾は大慾である。金錢よりも、名譽よりも、地位よりも、尙ほ大なるものを求めるのである。

○いひかふれば、小なる肉に死して、大なる靈に生きやうとするのである。

○インダス河畔に立つて、世界復た征略すべき地のないことを嘆じた歴山翁と等しく、宗教は人慾の無限なることを證明するものである。

○英雄頭を回らせば則ち神仙といふが、歴山翁や秀吉家康

の抱いた大欲望は、一轉すれば直ちにこれ宗教的信仰である。
 ○要するに、今の所謂道德家所謂宗教家などが、自ら大ならんとする欲望を罪惡と視て、これを抑制しやうとするのは、到底一知半解の見、顛倒不通の論たるを免れないのである。

八 其は弊なり

○斯くいへば、所謂道德家所謂宗教家は、或は反駁の鋒を向けて來るかも知れない。曰く、自ら大ならんとする欲望、縦しそれが罪惡でないにしても、今日の人には現に此の欲望の爲めに罪惡を犯しつゝあるではないかと。

○今日の人が此の欲望の爲めに罪惡を犯しつゝあることは、否むべからざる事實である。が、此のこゝにかしはらず、此の欲望が道德の基礎であること、少くも道德の一半であることは（他の一半は他愛である）、勿論これを認めなければならぬ。前の説明はこれを明かにしたものである。

○自ら大ならんとする欲望が、道德の基礎（少くも其の一半）であることは、確乎不動の眞理であるが、而も此の欲望が罪惡の原因をなすこと、これ亦た眞理である。商人が業に勞し、學生が學に勵み、若くは宗教家が神を信ずるなど、すべて此の欲望に基くと同時に、

悪漢が他を陥れて自己の利益を求めものも、やはり此の欲望に基
づく。さうして彼は善であつて、是は悪である。

○此の點に於ては、善惡も同根のものである。

○此の事實は何とこれを解して可いか。罪惡は自ら大ならんとする
欲望の弊である。弊、此の一語を以て彼の反駁に答へることが出来
やう。

○物にはすべて弊がある。田を潤し船を通じて人の利益をなす所の
川は、同時に又た田を流し船を覆す所の川である。川には斯や
うな弊がある。自ら大ならんとする欲望に、罪惡といふ弊があれば

とて、決して怪しむには足らないではないか。

九 利己が罪惡となる場合

○弊とは何ぞ。善も惡も共に同根から生じたものであるならば、何
故に善として一を揚げ、何故に惡として他を抑へるか。と斯ういふ
反駁が、次いで來るかも知れない。此に於て、右に記した道德の意
義を回想する必要がある。

○自ら大ならんとする欲望、即ち自己の安寧幸福を求める意志
は、其の道德たること勿論であるが、單に之のみが道德ではない。
他に尙ほ他人の安寧幸福を求める意志がある。道德の意義は兩々

相待つて初めて完うせらるゝのである。

○故に各人が自ら大ならんを欲し、自己の安寧幸福を求むるに就ては、他人に對しても注意を拂はなければならぬ。即ち他人の生命を危くするとか、他人の財産を侵すとか、他人の自由を妨げるさかのやうに、他人の安寧幸福を害しないやうに注意すること、これが必要である。さうして進んでは他人の安寧幸福を増進することにも、力を盡すのでなければならぬ。

○道徳は各人に向つて斯く要求するのである。従つて等しく自ら大ならんとする欲望に基くものながら、若しそれが他人の安寧幸福を

害するやうであつたならば、道徳はこれを罪惡と認めるのである。

十 自然主義にも眞理あり

○近年道徳及び宗教に對して、敢然反抗すべく生じ來つた新らしき主義、それは自然主義である。元々文藝上の一主義であつたものが、轉じて人生觀上の主義となつたのである。

○自然主義は甚だ受のよくない主義である。而も時人に對する自然主義の影響は、極めて著しいものがある。殊に文藝を愛し、人生問題に多少の興味を有する青年は、凡て自然主義に動かされてゐる。中には既有的思想を其の根底より轉覆された者さへある。

○如何に轉覆されたか。曰く、道德及び宗教に對する尊信の念を、全然失つたのである。無道德、無宗教、これが自然主義の影響である。

○自然主義が一派の人に嫌忌せらるゝ所以は、亦た此に在るのであるが、而も自然主義には確乎たる根據がある。勿論多くの誤謬を有するけれども、其の誤謬の中に、動かすべからざる眞理がある。○兎に角此の著るしい主義に就て、一言を費すことは無要であるまい。

十一 自然主義の反抗

○こゝに一言しやうと思ふ自然主義は、文藝上の自然主義ではない、人生觀上のそれである。

○自然主義は其の名の示す如く、自然を重んずる主義である。人間の本来を重視し、性慾を貴び、本能を重じ、生きんとする欲望即ち生存慾、利己的性情を認める所に、自然主義の根據がある基礎がある。

○人として性慾のない者はない、生存慾若くは利己的本能を缺いた者はない。而も此等の欲望本能は、其の力の強大なること驚くべきものがある。人の日常行爲を支配するものは、道德でなく、

宗教でなく、實に此等の欲望本能である。

○此の事たるや、各人が自分の日常爲す所を省みるさき、直にこれに氣が附くのであるが、從來何人もそれとは知らずに、唯だ浮々と暮して来た。偶々文藝家の一部がかくと自ら覺つたこと、自然の萌芽は此に在るのである。

○既に生存欲を認め、利己的本能を認めた自然主義は、道徳と宗教とに對して、懷疑の念を懐かざるを得ない。といふのは此の二者は此等の欲望本能を以て、一個の罪惡、否寧ろ罪惡の根原とし、これを抑壓しやうとするからである。

○從來の人は日常此等の欲望本能に支配されながらも、尙ほ且つ道徳宗教の命ずる所に従はうとしてゐた。力を盡して此等の欲望本能を抑制しやうとしてゐた。而も其の理由、何故道徳や宗教の命ずる所に従はなければならぬか、何故此等の欲望本能を抑制しなければならぬかといふことに就ては、一切問ふ所がなかつた。此の問題に對しては、全然珍糞漢でゐたのである。

○ところが自然主義は、此等の欲望本能の強力なることを認め、而もそれが自然であることを認めることの必然的結果として、道徳宗教の前に何故と問うた。此等の欲望本能は、人の自然では

ないか、本性ではないか。自然に従ひ、本性に立つのは、人間當
然のことではないか。然るに道德や宗教やは、此の本性を抑壓しや
うとする。何故抑壓しなければならぬか。殊にはそれが人間の本
性である以上、これを抑壓するなどは、到底不可能のことではない
か。自然主義はかやうに問うた。

○かやうに問うた結果は、宗教、道德の無理なること、無意義なる
ことが解つて来た。即ち無道德、無宗教、これが自然主義の結論
である。自然主義は道德上及び宗教上の虚無主義である。

十二

自然主義と眞個の道德宗教

○自然主義の眞理は那邊に在るか。人間本具の性を重視し、生存慾
利己的本能の力を認めた點、こゝに自然主義の眞理がある。

○願みて思ふに、生存慾若くは利己的本能といふもの、取も直さ
ず自ら大ならんとする欲望に外ならぬのである。

○自然主義が道德や宗教に對する疑問、寧ろ反抗は、極めて痛烈な
るものがある。道德と宗教は爲めに瓦解し去つたかの觀がある。然
し其の道德、宗教は、たゞ舊來の道德、宗教であること、所謂道
徳家の道德、所謂宗教家の宗教であること、これを記せなければならぬ。
○眞個の道德、眞個の宗教に至つては、自然主義の爲めに、小搖ぎ

だもしないのである。

○眞個の道德は人の本性本然に基く。自ら大ならんとする欲望、自己の安寧幸福を求むる意志、これは勿論人の本性本然であつて、さうして道德の意義其の一半は此に在る。自然主義にして若し此の點に想到したならば、一概に道德を否定することはないであらう。

○道德の意義の他の一半は、他人の安寧幸福を求むる意志である。これ亦た人の本性本然であるが、自然主義は此のことを度外してゐるの觀があるが、人は利己的本能を有すると同時に、他愛的本能

をも有する。人性を觀るこそこの公平なる者は、此の兩者を併せ認むべきである。

○要するに道德は、人の本性本然に基くものである。従つて自然主義の反抗を受ける理由がない。自然主義の反抗を受くべきものはたゞ舊來の道德である、所謂道家の道德である。

○宗教さても其の通り、眞個の宗教は人の本性本然から來るのである(こゝにこれを詳論するの餘地なきを憾む)。従つて自然主義と戻るものではない、自然主義の反抗を受くべきものではない。自然主義の反抗を受くべきものは、舊來の宗教である、所謂宗教家の

宗教である。

十三 新道德、新宗教

○舊來の道德、舊來の宗教は、自然主義の反抗に因つて壊滅した。此に於て新道德、新宗教を建てなければならぬ。さうして謂ふ所新道德新宗教は、人の本性、本然に基くものであることを要する。

○而も眞個の道德、宗教が斯くの如きものであるならば、建てるのではなくて歸るのである。

○所謂道德家、所謂宗教家は、自然主義の反抗に對して、狼狽す

るには及ばない、憤激するには當らない。たゞ其の態度を改めれば可い。

○即ち人の他愛的本能を勵ますと同時に、利己的本能の價値を認めよ。他愛の道に背反しない限りは、人をして利己的に振舞はしめよ。利己的行爲の他愛的行爲と等しく善なることを承認せよ。人をして自ら大ならんとする欲望の爲めに努力せしめよ。自己の安寧幸福を更に大に追求せしめよ。人生、本具の生存慾を解放せよ。

○更に性慾を允可せよ。性慾の意義は深い。人が性慾を充さんとする直接の原因は、縦しや肉體的快樂に在りとも、これ知らず識ら

ずの間あひだに人類じんるいの永續えいぞくの爲ために努力かりよくするのである。社會しゃかい存立そんりつの基礎きそ、社會しゃかい進化しんかの根底こんていは此こゝに在ある。性慾せいよく決して罪惡ざいあくではない。

○從したがつて男女だんぢよかん間の戀愛れんあいを允可いんかせよ。

○次つぎには食慾しょくよくを允可いんかせよ。單たんに食慾しょくよくさはいはない。美食びしょくを得えんと

すその慾よくをも允可いんかせよ。綺羅きら飾かざり、高樓かうらうに住すまはんとするの慾よくをも

允可いんかせよ。一切さいの肉體にくたい的快樂てきけらくを允可いんかせよ。

○高位かうゐ高官かうかんに登のぼらんとする欲望よくほう、地位ちゐ財產ざいさんを高く大たにせんとする

欲望よくほう、これをも允可いんかせよ。

○斯かくの如ごとくにして、人ひとの行爲かうゐは縱横じゆうわう自在じざいとなるであらう。彼かれが頭づ

上じやうの壓迫あつはくは除のぞき去さられて、天てん空くう海潤かいくわつの思おもひなきを得えない。而しかも眞個しんこの道徳だうとく、眞個しんこの宗教しうけうは、優いうに此こゝの間に存ぞんし得うるのである。○惟おもふに、一いつたびは自然しぜん主義しゆぎ的思想しきさうに迄まで下くだつて、其處そこを基礎きそに更さらに再ふたび建設けんせつされたもの、道徳だうとくや宗教しうけうは斯かくの如ごときものでなければならぬ。

十四 成功せいかうの意義いぎ此かくの如ごとし

○以上いじやう道徳だうとくを説せき、宗教しうけうを説せき、一轉てん自然しぜん主義しゆぎに論及ろんきふして、爲ために縷る々の言げんを費つひやしたが、要えうするに人ひとには自ら大だいならんとする欲望よくほうのあること、此この欲望よくほうの強きやう力りきなること、道徳だうとく上じやう宗教しうけう上じやうに於おけ

此の欲望の位置、即ち此の欲望が道德上宗教上少しも差
問へのないものであること、此等のことを明かにしたのである。

○今の人が成功の途に役々營々たる其基礎は、自ら大ならんとす
る欲望に在る。故に若し此の欲望にして、何等の根柢なきもの、宗
教上道德上無價値のものであるならば、成功に對する今人の努
力も、亦た無價値に歸し去るのである。

○成功を欲する者は、先づ以て以上説く所を明かにして置かなけ
ればならぬ。かくてこそ所謂成功に價値がある、意味がある。

○たゞ漫然と成功を欲するのみで、人生上に於ける其根據、道德

上將た宗教上に於ける其の意義を了知するのでなければ、甚だ没
趣味である、殺風景である。

十五 如何にして成功すべきか

○自ら大ならんとする欲望が、人間本然の性であつて、而も道德
上宗教上何等の差闕へなきのみならず、道德宗教といふも
の亦た此の欲望に基くのである以上、今日の人が此の欲望に馳られ
て、營々役々成功を求めて已まないのは、まことに尤もな次第
である、少しも咎むべき理由がない。

○嘗に咎むべき理由がないのみならず、大にこれを勸奨すべきで

ある。人として此の世に生存する上は、醉生夢死を以て已むべきではない。何等かの事業、何等かの方面に於て成功しなければならぬ。

○然らば如何にして成功すべきか。今日の人一人として成功を欲しない者はないが、而も成功の目的を達する者は寂々寥々ホンの一部の人に止まる。大多数の者は、成功を欲して成功を得ず、却つて失敗の淵に沈淪するのが事實である。一部の人は何故に成功するか。大多数者は何故に失敗するか。成功を欲する者は、先づ此の點に就いて考へなければならぬ。

○成功には成功の道がある。其の道を進むのでなければ、成功に達することは出来ないのである。

十六 偉人成功の徑路を檢せよ

○成功の道として第一に擧ぐべきは、偉人成功の徑路をしらべることである。偉人は即ち成功者である。然らば如何にして成功したか。如何なる態度、心術を以て世に處し事に當つたか。如何なる性格が彼等をして成功せしめたか。此等の點を考査して、自身これを學び、己の缺點を改めて行くこと、成功の道としては、これが最も賢く、さうして第一のものである。

○汽車に乗つて旅をするものは、窓外見る所の平凡なる光景に對して、倦怠無聊を感じる場合が多い。偶々名山の雲に聳ゆるを仰ぎ、大河の前に横はるを望み、若くは浩浩々々横まに際涯なき万里の波濤に觸目することがあつて、前の倦怠を癒し無聊を慰めることが出来るのである。

○偉人が世に在るのは、猶ほ此の名山大河、或は万里の波濤にも似てゐる。衆愚を集めて成れる此の社會は、如何にも平凡極まつたものである。もし偉人がなかつたならば、世の中は如何に殺風景なものであらうぞ、歴史は如何に没趣味なものであらうぞ。人間

社會の平板單調は、偉人に依つて辛うじて破られつゝあるのである。

○單に此の一點より視ても、偉人の價值は極めて大なりとしなければならぬ。

○旅中名山を仰ぐ時の心持ち、それがやはり偉人に對するときは心持ちである。即ち驚嘆である、崇敬である。カーライルは人は偉人崇拜の本能があるといつたが、然る本能の有無は兎に角、偉人に對して驚嘆の念を催すことは、何人も免れないところである。○然し單に驚嘆して已むのは、偉人に對する適當の態度ではない。

自ら勵まして其の事業を學ばなければならぬ。これを學ぶに就ては偉人が其の大事業を成し得た所以、即ち成功の徑路を檢して、これを他山の石とすることが必要である。

十七 成功し得る性格 (其の一)

○成功と失敗とは、各人性格の問題である。人は失敗すると、罪を境遇に嫁し、偶然生起し來つた障礙に嫁し、他人に嫁し、時勢に嫁し、資本の缺乏に嫁しなどする。境遇の罪、乃至資本缺乏の罪、成るほどそれもある。けれども世の成功者は、其等の困難に打勝つて成功したのである。彼の優秀なる性格に對しては、境遇も

其の力を逞ましくすることが出來ず、乃至資本の缺乏も彼を碍ぐることが出來なかつたのである。即ち成功不成功は人々性格の問題であるのである。

○人には成功し得る性格の人と、成功し得ない性格の人とある。成功し得る性格、それが何んな性格であるかは、偉人即ち成功者の性格を研究すれば解るのであるが、左に其の數者を思ひ出づるがまゝに記して見やう。

○第一には志の確乎不拔なることである。或る一事に志した以上は、其の事の成就する迄は、如何なる困難が起らうとも、如何な

る障碍に出合はうさも、斷じて其の志を曲げない。何處迄も其の目的に向つて奮進する。時には失敗することもありう。然も失敗に因つて挫けるやうなことはなく、一層の勇氣を奮ひ起して、前へ前へ進んで行く。これが必要である。

○世の成功者を見よ。彼等は轉んでは起き轉んでは起きして、成功の域に達したのである。一旦の失敗に因つて、若くは些々たる障碍の爲めに、志を棄てたり變じたりするやうでは、成功は到底覺束なしである。

十八 成功し得る性格 (其の二)

○次には忍耐に富むこと、我慢強いこと、これが必要である。如何なる事業にも必ず多少の困難が伴ふ。事業が大なれば大なるほどこれに伴ふ困難も大である。故に事業を成さんとする者は、豫め此の困難に堪ゆるの覺悟がなくてはならない。平々坦々何等の困難なくして成就し得る如き考へて事を始めたならば、必らず驚愕を以て半途に其の事を中止し、失望を以て終らなければならぬのである。

○ナポレオンは戦勝の決は最後の五分間に在りといった。戦鬪長きに及んで而も勝敗の數の判明しない場合、最後の五分間を忍耐し

得た者が、戦勝者たる名譽を荷ひ得るのである。一切の事がすべて然うである。事將に成らんとして、今一息の忍耐が出来なかつたが爲に、形勢一變成功が失敗となることは珍らしくない。九仞の功を一簣に缺くさは、此の弊を戒めたものである。

○次には、機會を見るの明がなくてはならぬ。成功には成功の機會がある。其の機會に乗じて事を成せば、其の事は必らず成功する。西洋風の將に盛んならんとする場合に、洋服屋又は西洋小間物屋を始める。即ち機會に乗じたのである。自然主義風の小説が流行する場合に、其の原稿を求めて出版する。即ち機會に乗じたので

ある。而も機會に乗ずるには、機會を見る明がなくてはならない。○時勢は時々刻々に變化する。其の變化は常に成功の機會を與へるものである。成功の機會は到る處に在る。然るに通常一般の人は、其の機會を見ることが出来ない。偶々他に其の機會に乗じて成功した者があると、初めて氣がついて、ア、惜しいことをしたと嘆息する位わが關の山である。

十九 成功し得る性格 (其の三)

○機會を見たらば、直ちにそれを捉へなければならぬ。機會は長く同一所に留まるものではない。忽ち來つて忽ち去つてしまふ。故に

機會を見たらば、直にそれを捉へ、それに乘じて事を始めるのでなければならぬ。それには決斷が必要である。決斷力に富むこと、これ亦た成功に要する一性格である。

○決斷力の乏しい人は、狐疑し躊躇して、機會を見ながらこれを逸してしまふ。

○次には勇氣が必要である。人をして多少危険なることをも斷々乎として行はしむるものは勇氣である。虎穴に入らずんば虎子を得ず。危険を恐れてゐては事は出来ない。或る西人は、唯だ行へ其の事必ず成らんといつたが、確かに然うである。

○斷じて行へば鬼神も避くといふ如く、勇氣の前には危険もない、困難もない、障碍もない。豈我を妨ぐるアルプスあらんやである。

○憂ふべきは危険ではない、乃至障碍ではない。これに打ち勝つ勇氣の乏しいことである。

○獨立心に富むこと、これ亦た成功し得る性格の最重最要なる一である。獨立心とは他人に依らず、自己の才力手腕にのみ頼んで事を爲すの心である。

○他人に依つて事を成すといふことは、一見賢き手段のやうに見えるが、それは自分に勇氣の乏しいこと、才力のないこと、安樂を

貪る心、約してこれないへば、意久地のないことを示すもので、

そんなことでは大事業は成し得るものでない。

○殊に他人に依り頼む者は、其の人の幸不幸が直ちに自分の幸不幸となり、其の人が運悪く失敗するとか、死ぬとかすれば、自分は悲惨な目に遇はなければならぬ。木から落た猿といふのは、其の有様を譬へていつたものであらう。

○其の人の幸不幸のみではなく、其の人の御機嫌次第で、自分の運命が決せらるゝ。だから常に其の人の顔色を伺ひ、其の人の一顰一笑にも氣を揉まなければならぬ。勢ひ發達するものは奴隸根性

である。奴隸根性は男子の最も耻づべきものである。

二十 成功し得る性格 (其の四)

○獨立は常に他人よりの獨立のみではない。更に金錢より、地位より、境遇より獨立しなければならぬ。即ち金錢乃至境遇に依頼しない。金錢は無くとも可い、境遇は困難であつても構はない、自分自身の才力手腕に依つて、見事成功して見せる、さ斯ういふ考へが必要である。

○金錢乃至境遇に依頼すれば、他人に依頼すると同一の失敗がある。

○金銭よりの獨立、乃至境遇よりの獨立、獨立の意義は此に至つて完きをを得るのである。

○それから職業を愛すること、これが必要である。世には他人の職業のみ羨望して、自分の職業に冷淡な者が少くない。斯やうな人の前途には、たゞ失敗があるばかり、憐れむべきである。

○職業を愛してこそ、職業に對する興味もあり、熱心もあり、勉強もあり、工夫もある。かくて初めて成功し得るのである。

○正直であること、信用を重んずること、これ又た必要である。正直の頭には神宿るといふ。正直は最善の方便なりともいふ。正直は

成功の一大要素である。世には人に優れた才智才能を有つてをりながら、正直の徳を守らないが爲めに、人に不信用であるが爲めに、社會から擯斥されて、折角の智能を發揮し得ないでゐる者が少なくない。身から出た錆とはいへ、氣の毒なわけである。

○勤勉であること、規律正しく事を執ること、此等の成功に必要なことは、特にいふまでもない。

○最後には、體の健康であることが必要である。體が弱くては何事も成し得ない。殊に強健なる精神は強健なる身體に宿るさかいつて、成功に必要な忍耐力、勇氣、勤勉、規律、決斷など、體の健

康不健康に影響せらるゝこそが少くない。
 ○故に人は常に衛生を重んじ、運動を盛んにして體の健康を圖らなければならぬ。體の健康を圖ることは、單に體の爲めではなくて、間接には心の爲めである。更に間接には事業の爲めである。

二十一 成功の弊

○成功は人間本具の性たる、自ら大ならんとする欲望に由る。此の欲望はいひ換ふれば自己の安寧幸福を求むる意志である。更にいひ換ふれば利己心である。
 ○利己心大に可し。人が各自に勤勞して、自己の安寧を保ち幸福を

進めやうとする心が、何の悪からう筈はない。國家は人々の此の心に依つて富強になつて行くのである。社會は人々の此の心に依つて進歩發達して行くのである。或る一派の人が、此の心を罪惡視するのは不通の甚しい論議である。
 ○利己心は罪惡でない。音に罪惡でないのみならず、これ道徳である。善の一半はこゝに在るのである。
 ○然し一派の人が、利己心を罪惡視するのは、理由のないことではない。何故ならば、今日の人には現に利己心の爲めに罪惡を犯しつゝあるからである。

○利己心は善である。けれども善のすべてではない。他に尙ほ他愛心がある。利己心と他愛心とが相合して、善の意義は完うせらる。自己の安寧幸福を求めると同時に、他人の安寧幸福をも求める、といふので、初めて完全なる道徳は成立つのである。

○ところが人は此の事を忘れて、単に利己心のみ用ひやうとする。自己の安寧幸福を求めると同時に、他人のそれを害し妨げて平氣である。人を陥れる、人を欺く、人を誹謗する、人と争ふ。甚はだしければ父子、兄弟、夫婦の間に於てさへ相争ふ。即ち今の人は利己心の爲めに罪惡を犯してゐる。利己心を直ちに罪惡視す

る者のあるのは、決して異とするには足らぬ。

○自ら大ならんとする欲望の爲めに、即ち利己心の爲めに成功を求めつゝある人々は、此の點特に注意して、不善不道徳に陥らないやうの心がけが必要である。

二十二 人としての成功

○今日一部の識者は、所謂成功に對して嫌らず思つてゐるさいふのは、成功に就いて類々發表せらるゝ言議の多くが、人に向つて無闇に大きくなれと勧め、利己心を挑發するに止まつて、道徳問題、人格問題、修養問題を閑却する傾きがあるからであらう。

○さうして今の成功を求めらる者も、斯やうな考へで成功を求めてゐるからであらう。識者ならぬ者も、これでは嫌らぬ心地なきを得ない。

○自分の成功を求めるのは可い。然し他人を忘却してはならない。自分の成功を求めるとき同時に、消極的には他人の安寧を妨害せぬやう、積極的には其の幸福を増進するやうの心がけが必要である。○これ畢竟利己心と他愛心とを併せ用ひたもので、道德の意義はこゝに全くせらるゝのである。かくてこそ人は道德上價值ある人となり得るのである。

○然しそれは容易の事ではない。利己心にのみ偏傾したくなる。他愛といふことを忘れ易い。然かく偏傾せず、又た之を忘れないで、道德上價值ある人となるに就いては、大に精神を修養しなければならぬ。修養の功を積んでこそ、人は始めて道德的人格を完成し得るのである。

○道德的人格の完成、これ豈人間の成し得る最善最大の事業ではないか。

○人若し道德的人格を完成し得るならば、それも一つの成功である、道德に於ての成功である。而も人の價值は詳しういへば道

徳的價値であるから、道德に於ての成功は、やがて人としての成功である。

○人としての成功、これ豈望ましきことではないか。如何に大なる政治家となつても、如何に大なる實業家となつても、人としての成功が零であつたら何うか。即ち道德上の價値が零であつたら何うか。其の精神が利己一點張の、不善不道德なるものであつたら何うか。其の人は卑しむべき人である。

○自働車に乗つた禽獸、大厦高樓に住む禽獸、世にはこれが少くない。彼等も一種の成功者であらう。然も人としての成功が零であらうぞ。

二十三

○かるが故に、敢えて今日の人に忠告する。政治家としての成功を求むると同時に、人としての成功を求めよ。實業家としての成功を求むると同時に、人としての成功を求めよ。人となること、道德的人格の完成、常に此のことを忘れるな。

○今の所謂成功は、餘りに物質的である、肉慾的である、現世的である。これも可い。然しこれのみが成功ではない。

○例へば右にいふ人としての成功の如き、單にそれのみとしても偉大なる成功であるが、其の成功は今の所謂成功とは、大分意味が異なつてゐる。孔子は其の弟子顔回の賢を嘆じて、賢なる哉回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人は其の憂に堪えず、回や其の樂みを改めず、賢なる哉回や、といつたが、今の所謂成功からいへば、陋巷に饑を忍んだ顔回は、一個の失敗者たるを免がれない。然も彼は道德的人格を完成した君子で、人としての成功は充分にこれを收め得たのである。

○又た宗教家の生活の如き、今の所謂成功からいふと、或は失

敗であるかも知れない。彼には何等の現世的榮譽がない、物質的幸福がない、美名もなければ美食もない。破衣弊笠、一鉢を擁して他人の布施を待つ彼の生活は、今の所謂成功とは、大分かけ離れてゐる。即ち失敗たるを免れないのである。

○然し彼の主觀に於ては、彼は如何なる現世的榮譽よりも、如何なる物質的幸福よりも、尙ほ大なる榮譽、尙ほ大なる幸福を、現世を超越したる他界に於て、神若くは佛に於て獲得してゐる。此の榮譽此の幸福に比すれば、現世的榮譽物質的幸福の如きは區區いふに足るものではない。即ち彼は小なるものを捨て、大なる

るものを得たのである。決して失敗者ではない。縦し彼の宗教が一つの空想に止まるにしても、これを信じて真とする彼の主観に於ては、彼は偉大なる成功者である。
○成功の意味は廣い。單に現世的、物質的の意味に解してはならない。

(終)

寸珍叢書

總クロース洋装美本
各定價廿錢郵稅二錢

第一編

明治天皇

御製聖訓

山田愚木編

●御製を謹解するの傍ら御聖徳を拜記す以て先帝の聖徳を仰ぐべく以て精神を修養すべし

第二編

名家家訓

成功座右銘

河内夏山編

●先哲偉人の教訓及び名家訓を蒐輯して一書となす修身齊家之道を知らんと欲する者は之を讀め

第二編 修養格言全集 桑田春風編

● 格言 俚諺は人々 修養の經典 處世の羅針なり 渺たる
此一書は實質に於て千萬卷の書冊に優れり

第四編 格言訓話 山田草人編

● 數多き格言中 今人に適切なるものを撰出して何人にも
解し易きやう簡明なる註解を施したり

第五編 青年學生 勉強法 山田草人編

● 勉強にも方法あり 最も少き勞力を以て最も多
くの効果を收めんと欲せば先づ勉強法を知るを要す

第六編 偉人成功の徑路 山田草人編

● 偉人は如何にして成功せしか 成功を欲する者は本書に據り
て先づ此一事を知るを要す

第七編

現代語譯

鳩翁道話

山田草人編

●鳩翁道話の價值は今更ら**いほす**之を現代語に譯して一種特異の**新味**あらしむる者は本書なり

第八編

忍耐力の修養

山田草人編

●忍耐は成功の母也活社會に處して成すあらん**欲**する者は本書に**鑑**みて大に忍耐力を養成せよ

大正二年三月十日印刷
大正二年三月九日發行

不許複製

著者 山田草人

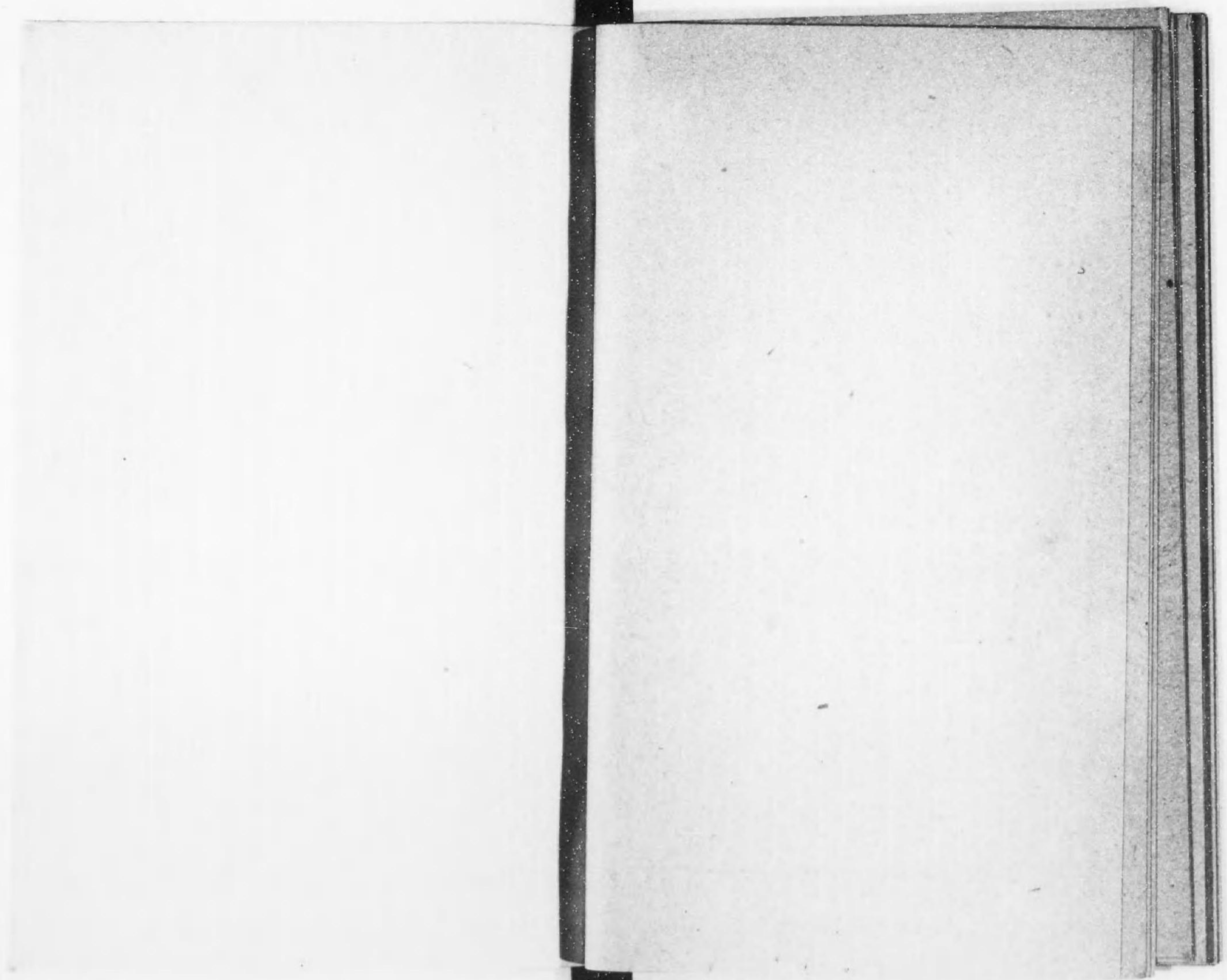
發行者 岡村庄兵衛
東京市淺草區下平右衛門町九番地

發行所 岡村書店
東京市淺草區下平右衛門町九番地

電話 下谷四二〇四番
振替口座 一九〇六五番

印刷者 井出五三九
東京市日本橋區若松町二十一番地
印刷所 日進社
東京市日本橋區若松町二十一番地

(定價 金 二 十 錢)



274

26

終

